

Major League Soccer の発展をもたらした 選手獲得の制度改革と勢力均衡度合いに関する研究

スポーツビジネス研究領域

5017A0022-3 河野遼兵

研究指導教員：平田竹男 教授

【序論】

欧州型スポーツリーグ構造の代表スポーツであるサッカーは、アメリカ合衆国（以下米国）では「サッカー不毛の地」と呼ばれるほどに人気のないスポーツであった。しかし、1994 年 FIFA W 杯米国大会をきっかけに米国における人気が高まり、1996 年にプロリーグ「メジャーリーグサッカー（以下 MLS）」が開幕した。MLS は欧州プロサッカーリーグとは異なり、米国型スポーツリーグ構造（クローズド・シングル・エンティティ・サラリーキャップ等）を採用している。MLS 開幕時は 10 クラブで始まったが 2018 年には 23 クラブに拡大し、平均観客動員数は約 2.2 万人を記録し、シーズン総観客動員数は開幕時より約 3 倍に増加している。リーグ機構は加盟クラブを 2020 年までに 28 クラブまで拡大していくことを公表している。したがって、MLS は成長著しいプロスポーツリーグと評価できる。

平田竹男が提唱するスポーツビジネスにおける「勝利・資金・普及のトリプルミッションモデル」に先行研究をあてはめると、「資金」では、宮崎の研究（2007）と大山の研究（2015）がある。「普及」では、小堀の研究（2017）がある。米国スポーツリーグ、J リーグ、プレミアリーグにおける勢力均衡度合いに関する研究では、Rottenberg（1956）川名の研究（2010）がある。しかしながら、MLS を「勝利」の側面から分析した研究が存在しない。MLS の選手獲得の制度改革と勢力均衡度合いという勝利の側面を明らかにすることでプロスポーツリーグ MLS の発展過程を因数分解ができるため本研究は意義深いと言える。

【研究目的】

本研究の目的は、MLS におけるリーグの発展をもたらした選手獲得の制度改革と勢力均衡度合いを明らかにすることである。

【研究手法】

1. 文献調査

MLS における選手獲得方法や育成環境の制度改革を明らかにするため、MLS 公式ホームページ記載の

リーグ規約や MLS に関するウェブニュース記事、書籍から文献調査を行う。

2. インタビュー調査

選手獲得と育成環境に関する質的調査として MLS リーグ機構に所属する中村武彦氏にインタビューを実施する（2017 年 10 月 26 日実地）。

3. 勢力均衡度合いの測定

先行研究に基づき、2005 年～2007 年における MLS の上位 3 割のクラブの勝ち点支配率とリーグ全体の均衡度合いを測定するためにハーフィンダール指数（HICB）を用いる。MLS では、シーズンに応じて加盟クラブ数が変動することも考慮する。

【研究結果】

1. 文献調査

表 1 より、MLS における選手獲得と育成環境に関しては、ドラフト制度の統合、特別指定選手制度（以下 DP 制度）の成立、DP 制度の 2 度の制度変更と Generation Adidas 制度の成立（以下 GA 制度）、下部組織チーム・育成リーグ、Homegrown 制度（以下 HG 制度）の成立がわかった。

1998 年 8 月よりドン・ガーバーがコミッショナーに就任した。ドン・ガーバー就任後、サッカー専用スタジアムの推進、Soccer United Marketing の創設、DP 制度の導入などの功績があった。2011 年 3 月 11 日 ESPN, インタビュー記事より「更なる投資を行い、試合内容の向上とサッカー市場の成長、勝ち負けに固執しないマネジメントの実現から MLS のファンを増やしたい」とコメントしていることがわかった。

表 1 選手獲得と育成環境に関する制度一覧

年	制度名
2000 年	Super Draft 制度の統合 (Supplemental Draft と College Draft 制度)
2006 年	特別指定選手制度の成立 Generation Adidas 制度の成立
2007 年	MLS Development Academy と U.S. Soccer Development League の成立
2008 年	Homegrown 制度の成立

2. インタビュー調査

インタビュー調査より MLS の基本原則は勢力均衡であること、2006 年以降の DP 制度やドラフト制度は競争や注目度高め、新人選手の国外流失を防ぐために GA 制度を設けたこと、トライアウトでは加入希望の外国籍選手の多数がいることがわかった。また、欧州 CL 上位クラブの仏人指導者が多いことから仏サッカー協会と連携し、MLS 全クラブコーチへの研修合宿を実施していることがわかった。

3. 勢力均衡度合いの測定

上位 3 割クラブの勝ち点支配率は平均 122.2 値で推移しており、最低値は 2015 年の 116.0 値、最大値は 2018 年の 127.9 値であった。HICB では、2013 年に最高値 110.2 を記録し、2015 年に最低値 100.4 を記録している。MLS では、対象期間において HICB 平均値が 104.1 で推移していた。割いては、2015 年 100.4、2017 年 100.8 という数値を記録するし、均衡度合いが非常に高いことがわかった。

【考察】

考察 1 : MLS の多国籍リーグ化

結果 1、2 から図 1 は、プロサッカー選手移籍市場やクラブ市場価値を掲載しているウェブサイト transfermarkt より、2007～18 年における MLS 所属選手の国籍（米国籍と外国籍）とクラブ市場価値の合計値の推移である。DP 制度導入と制度変更後、外国籍選手数は増加傾向にあり、2015 年以降では米国籍選手より外国籍選手数の方が多く、クラブ市場価値も上昇傾向となっている。したがって、MLS では外国籍選手を受け入れているといえる。

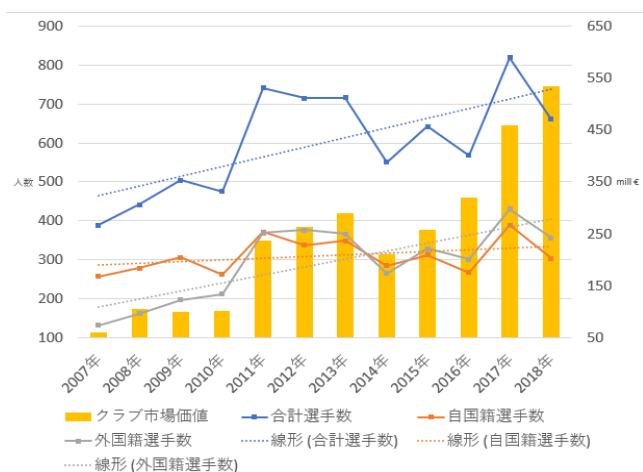


図 1 2007～18 年の選手国籍とクラブ市場価値推移

考察 2 : MLS と各国リーグの均衡度合い

結果 3、先行研究に基づき 2005 年以降の MLS と J リーグ、ブンデスリーガ、プレミアリーグにおけるシーズンリーグ全体の均衡度合いと成績上位 3 割クラブの勝ち点支配率を比較すると、図 2、3 の通り MLS は両数値ともに低い値をしている。つまり、MLS は 2007 年以降、リーグ基本原則であるサラリーキャップの例外措置である DP 制度導入、制度変更を行っても競争均衡度合いは保たれているため、米国型スポーツリーグ構造が MLS で成立していることが示唆される。

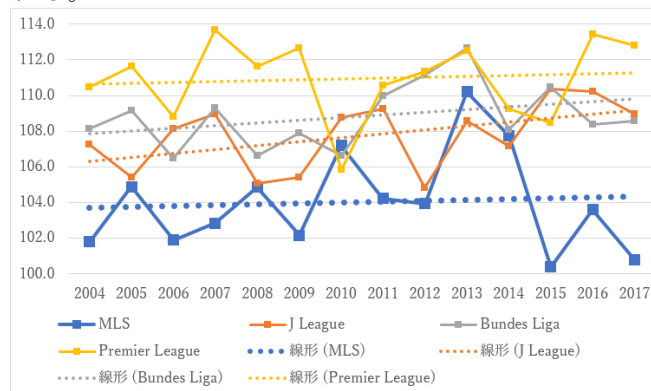


図 2 各国リーグにおけるリーグ全体の均衡度合い(HICB)の推移

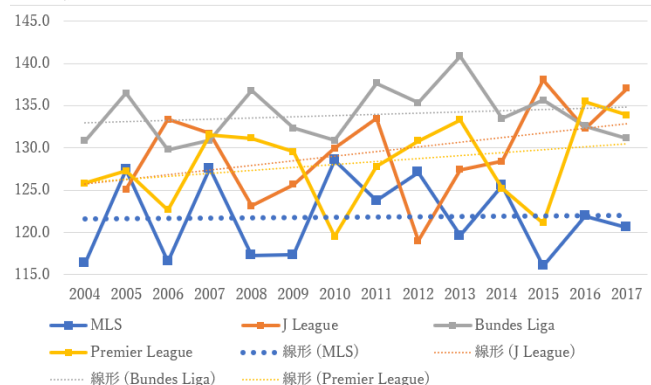


図 3 上位 3 割の勝ち点支配率の推移

【結論】

MLS は、サラリーキャップというリーグの基本原則がありながら、少数の選手に限ってその例外を認める DP 制度、若手選手の早期ドラフト指名候補選手となる GA 制度、下部組織出身選手をサラリー予算外で加入を認める HG 制度という制度改革を行った。人件費を抑制しつつリーグの魅力を増すための制度改革が奏功した。一方で、クラブ間の競争均衡度合いは保たれており、米国型ビジネスモデルが MLS で成立している。また、外国籍選手数も増加しており、リーグ多国籍化も進展している。

